<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>題名</td>
<td>平田国学による祭祀の創意とその波紋・『毎朝神拝詞記』・『玉禱』を例に</td>
</tr>
<tr>
<td>著者(s)</td>
<td>中川 和明</td>
</tr>
<tr>
<td>引用</td>
<td>書物・出版と社会変容・2015-10-10</td>
</tr>
<tr>
<td>日時</td>
<td>2015-10-10</td>
</tr>
<tr>
<td>種類</td>
<td>Journal Article</td>
</tr>
<tr>
<td>テキスト版</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10086/27527">http://hdl.handle.net/10086/27527</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
平田国学による祭祀の創意とその波紋

平田国学による祭祀は、何の様々なものであろうか。

開放学に於る祭祀は、そのようなものであろう。

毎朝神拝詞記・玉薫を例に

はじめ

中川 和明

平田国学の祭祀は、政策一致も説かれていた。
明治初頭に平田派の人物が行政に参画している。しかし、同派の考えが
新政府にそのまま採用されていたわけではない。

神祇は一学派の問題ではなく、維新政権の行為であった。
平田国学の祭祀を解明することはできない。そこで、本
稿が注目するのは近世後期から平田塾が熱心に出版して
いた毎朝神拝詞記・玉薫といった祭祀の論文の書籍
である。これらは篤胤生前から出版を開始し、明治期ま
で改訂しながら出版していたものである。

紙・玉薫の成立・流行・影響を検討することなしに、平
田国学の祭祀の歴史的な位置を問題することは困難であ
公開で明らかになったため、書の書物・出版に関する本格的な研究が可能となった。両書の成立と流布を中心に検討していくこと、平田国学による祭礼が果たした歴史的な役割について再検討してみたい。なお、平田国學の刊行物の刊行年月については、『平田鑑刊本目録』（特別展図録『明治維新と平田国学』七三頁）を参照していただきたい。本稿では、『国立歴史民俗博物館研究報告』を『歴史研究報告』と略記した。した実践的なものといえることができる。江戸市井の無名の新規入門者の配布に、文化元（一八九四）年、篠場は江戸に塾を開設した。

【実践の書としての「每朝神徳詩記」】

一、新規入門者の配布

文化元（一八九四）年、篠場は江戸に塾を開設した。

二、文化元（一八九四）年、篠場は江戸に塾を開設した。

三、文政三年三月一日、篠場は江戸に塾を開設した。
76
表1『改正再版毎朝神拝詞記』と版本『玉櫛』の関係

<table>
<thead>
<tr>
<th>毎朝神拝詞記の目録</th>
<th>版本『玉櫛』</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>巻1</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>巻2</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>巻3</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>巻4</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>巻5</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>巻6</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>巻7</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>巻8</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>巻9</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>巻10</td>
</tr>
</tbody>
</table>

先頃申上候毎朝神拝式訂正本早速差上申度候所小子
旅行かじ二便在何か上行欠伸延引いた候。今般峡
入二部略製之方四部差上候間、軸入八業合君玉中君
御所持可被下候。志賀君へ先頃差上申候、外四ツ
も軸入之方差上度候へ共今便間三合兼農間、亀候な
から差上申候。小谷小杉杉松末四君へ御贈可被下

中玄良宛鏡胤書箋『書簡研究』三）には、
毎朝神拝詞記』の略編本について、『気吹吹日記』に
保三年七月三日のところに、『備前龍中へ玉ただし十
書状添出、玉中へ向ケ京都へ出、石摺二ツ・神拝略本
三部添（歴博研究報告一八集五四頁）とみえる。塾で
篤胤晩年に書かれた写本『大壑平先生著撰書目』（平
田篤胤著述目録）一冊についての解題があり、「此は我
み門生の徒に、日々に拝すべき神々。また先祖の祭屋
に白ず詞を教へ示され、且その拝式をも記されたれば、
古学の徒一日も聞べからざる物なり」と記されている。
この神拝詞記が門人向けの著述であることがわか
るであろう。神拝を欠けてはいけないとし
ている点にも注目すべきである。

この増訂『毎朝神拝詞記』の神拝の項目をあげ
ると、表1のようになる。祝詞の形式で毎朝
読み上げるというものである。表1には、後
述する版本『玉櫛』との関係も分かるようにして
書いた。関東をはじめ東日本の神社がや多くな
んである。関東をはじめ東日本の神社がや多くな
っているように思われるが、これは篤胤が江戸に

77
三）故篤胤殺免後の『毎朝神仏詛記』改版と『古の様式』

篤胤が死去したのは天保四年間九月であった。それから数年後、嘉永二年に故篤胤が殺免となった。篤胤は早速、『毎朝神仏詛記』の改版を進めた。例えば、嘉永三年三月付の神仏資敬王の表文（平田延胤謹製）を新たに追加して、嘉永四年四月に改版刊行した。この神仏資敬王の序文では、『古の様式を教へる毎朝神仏詛記という物』と説明されている。篤胤によって古代の様式が復原されたということである。その後、嘉永四年六月二日の日付業々合之枝原之書簡（本稿研究）に改版が出た。

四）地方の平田門人による受容と変容

平田塾の書簡に、『毎朝神仏詛記』はどのように受容されたのであろうか。塾資敬王の門人である。平田に学ぶための中心人物である。『菊池正古年譜』が地元の研究家小原弘化元年七月一日秋田で篤胤の墓参りをするなど熱心な門人であった。

この菊池は『毎朝神仏詛記』（写本）を著していって、刊行されたものではないが、序文（安政五年一月及川恒信、菊池門人）と跋文（弘化四年）が地元の研究家小原弘化四年（一八四七年）と考えられる。菊池によれば、篤
表2 菊池正古の『毎朝神拝詞』

<table>
<thead>
<tr>
<th>No.</th>
<th>毎朝神拝詞の項目</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1</td>
<td>大和国の方に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>天つ日に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>3</td>
<td>西方に向ぬ。</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>伊勢国の方に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>常陸国下総国の方に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>出雲国の方に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>大和国の方に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>8</td>
<td>常陸国の方に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>9</td>
<td>伊豆国の方に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>10</td>
<td>尾張国の方に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>11</td>
<td>当国一宮の方に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>12</td>
<td>当所の鎮守神の方に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>13</td>
<td>家に齎き奉る神等の神棚の前に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>14</td>
<td>別に手を拍ち。</td>
</tr>
<tr>
<td>15</td>
<td>別に手を拍ち。</td>
</tr>
<tr>
<td>16</td>
<td>別に手を拍ち。</td>
</tr>
<tr>
<td>17</td>
<td>別に手を拍ち。</td>
</tr>
<tr>
<td>18</td>
<td>別に手を拍ち。</td>
</tr>
<tr>
<td>19</td>
<td>井田キロラ座統神の御前に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>20</td>
<td>田寄神の御前に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>21</td>
<td>産科神の御前に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>22</td>
<td>水屋の神の御前に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>23</td>
<td>金神の方に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>24</td>
<td>厨の方に向ひて。</td>
</tr>
<tr>
<td>25</td>
<td>学問の神に向ひて。（八意思兼神、忌部宿祢神、太朝臣神、菅原朝臣神、岡部大人、平田大人、久延毘古命）</td>
</tr>
<tr>
<td>26</td>
<td>代々の祖等の霊屋に向ひて。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

注）明治初期の改訂と平田国学の近代 菊池正古の『毎朝神拝詞』に加筆訂正して作成したものである。表2は菊池正古の『毎朝神拝詞』の項目をまとめたものである。写本のままであったので、菊池とその門人が毎朝の神拝に用いていたものと考えられる。最大の特徴は、篤胤没後、学問の神として新たに篤胤を毎朝神拝の対象として追加したことである。平田国学では、篤胤没後に改訂の機会があったが、『毎朝神拝詞記』の改訂では、篤胤を毎朝の神拝の対象に加えている。そのことからすれば、菊池の『毎朝神拝詞記』は平田派による祀の受容と変容を考察するうえで、たいへん貴重なものがいうことになるだろう。慶応三年二月二日菊池が死去した。篤胤の『毎朝神拝詞』がどれほど広がりを持っていたのかは明らかではない。その他、篤胤以外でも、平田門人が篤胤の『毎朝神拝詞記』にならって、独自に毎朝の神拝の次第を定めている可能性もある。
何れも不得実手ぬるく候問、何れも水かけ論とか申

作為る道二道之趣早相弁へられ候やう

二と心懸相記し度故、人々多く懸望いたし候故、

ケ橋と速二相弁へられ候様ニハ参り兼候故、多く

八哥文二流し或ハ廃し、真の学業巣略ニ成行申候而

歎かしく存じ罷在候、

ある。これによりば、初学の人が『道之趣』を知るの

い適していること、宣長の著述を読むだけで不十分な

と申へ候故、毎日より末迄八神拜之詞を本文と言た

度論の起る間数やう二方付申候而次々古道学の起原

を述へ申候、御町座までを具二演説いたし、その因ミ

を述へ申候、御町座までを具二演説したし、その因ミ

重要箇所なのでその本分紹介したい。すなわち、

重要箇所なのでその本分紹介したい。

さらに、『玉園』の箇目を撰載成立について、やや長いが

此書影刻可致と存候事ニ御申候、尤も此書全部十

冊書二冊に紙員六百丁余之候、一二卷八総論

二冊細書二冊に紙員六百丁余之候、一二卷八総論

とある。卷一・卷ニは総論である。卷三から卷八までは

神々之御神徳御伝、また荷田・岡部・本居大人之

御伝を委敷訂正相記し申候、第十卷八謂ゆる先祖祭

りの一覧を具二相記し、人之子弟たるものを心得を

実理古説に依て演説いたし候、第十一・十二八附

録として日蓮宗ニ一向宗之仏道之中ニも

とある。卷一・卷ニは総論である。卷三から卷八までは

朝神拜詞記』を本文としても、それを注詣するもので

という思様になっていった。この書簡では、出版助成を依頼する

細についても書かれている。
（四）篤胤生前に『玉攄』一二巻本であった根拠

自身の構想では、『玉攄』は一二巻本であったので、ここで触れたい。結論からいえば、篤胤の手により、一巻で終えられた『玉攄』が一二巻本である。

『玉攄』の巻数についてやや細かく、重要な問題がある。そこでここで触れたくだきた。『玉攄』と訳されている（菱岡憲司）若き日の小説舞が説明しておくことにしたい。

第一に、先に見た文政元年一月日付口野村足立林平宛『玉攄』に、この書簡を天保三年と明記されている。二巻と明記されているとき、著者の本意が確認できる。実は渡辺金造は、金造（渡辺金造研究書簡編八九頁）に、『玉攄』の金は、全十二巻の内、一二巻本であることが確かである。この巻数は天保五年とみられるが、この時点で『玉攄』が一二巻本であったことが確認できる。実は渡辺金造は、の書簡を天保三年としている。年代比定に疑問がある。
きる。というのは、この書簡の中では今般「玉裸」と巻四に上
木したとあるが、巻四は天保五年六月の刊行であるから、
天保三年ではなく同五年と考えられる。さらに、右書簡
によれば、昨夜（一月二日夜）に平田塾を藤田東湖
が訪問したという。実際に、『気吹合日記』の天保五年一
月二日の箇所を見ると藤田が訪問してきたと書かれて
いるので、書簡の箇所は同五年に比定すべきである。

第三に、天保一三年五月二四日付田錦胤差出木嶋孝
当時四巻刻成「御座候」にあたる「吉田麻子、『知る共鳴』
五巻所載。天保一三年五月といえば、篤胤の最晩年で
ある。この時点でも、『玉裸』草稿は二巻構成であった
ことがわかる。

第四に、「大案夫先生著書目」（天保五年一月二
日序、天保一〇年一二月東書、谷吾年「平田篤胤の著
目録」所収）は篤胤生前に出来上がったものとみられ
る。この中に「玉多錦」、「十三卷」と書かれている。こ
の記述から天保初期に二巻本であったことが分かるで
ある。さらに、この「大案夫先生著書目」には解題
題にて、古道の本義は云ふも更なり。世々の治乱
及び儒仏等の道の大意。また古学の仍た結される由来
を詳かに説聞され。ついでに神祇を誓する。両新宗を弁張
てて十二巻。師の講本を。其ま深、上木したるなり。
と書かれている。真宗、』日蓮宗について神道を阻害す
るものと批判し、巻一・巻二として附録にしたという
りにおいて、自筆稿本「二宗論」が所蔵されている。この
本であったことは確かなるところであろう。
その他、秋田県公文書館には、篤胤自筆稿本「玉裸」
の他に、自筆稿本「二宗論」が所蔵されている。この
二宗論を実見して観察すると、玉裸巻一巻一・同巻二
巻二巻が二巻である。それによれば、天保五年六月の
刊行であるから、天保三年ではなく同五年と考えられる。
田園は、帰郷の旅を終え、故郷につながる道を歩く。

いま、故郷に帰る道を歩く。故郷の風景に心を落ち着かせる。故郷の音に耳を傾ける。故郷の香りに息を吸い、故郷の味に舌を味わう。

故郷の風景は、故郷の音は、故郷の香りは、故郷の味は、故郷に帰る道を歩く旅を、故郷の心に落ち着かせる。

故郷、故郷、故郷。

故郷に帰る道を歩く、故郷の心に落ち着かせる。故郷の風景に心を落ち着かせる。故郷の音に耳を傾ける。故郷の香りに息を吸い、故郷の味に舌を味わう。

故郷の風景は、故郷の音は、故郷の香りは、故郷の味は、故郷に帰る道を歩く旅を、故郷の心に落ち着かせる。

故郷、故郷、故郷。
平田門人岩崎長世は、「先師御著書出定笑語」との会説のためであります。
刊行に踏み切ったものと思われる。仏教が日本の風土に適さないとする根拠を「出定笑語附録」一之巻から抜粋すれば、

コノ御国自然ノ風ハ、今ノ身ノ繁昌、子孫ノ長久ヲ

ヨ悦ヒ。長寿ヲ願ヒ、万事賑々シク、物ノ盛リナル

ハ好ミ。寂滅ヲ以テ、楽ヲトスルヤウナ人ハ、神

ノ御心ヲシテ、生レスヲワケテゴザル。大和文華

館本

となる。現世的で楽天的な風土であるということである。
特に二宗を批判する理由については「撰二宗論トハ、一
向宗ト。日蓮宗ノ論弁ノコトダガ。此ノ二宗ホド、吾

ノ神ノ道ヲ妨害ヲ為ス者ハ、無コトモ故ニ止モトヲ得

ガ。弁駕ノソコメオゴザル。大和文華館本、同書巻

一之下、であるという。神道の拡大ヲ妨げタニト

トメタノモノである。

なお、木活字本の「出定笑語」や製版本「出定笑語附

録」が刊行されることで、嘉永・安政期以降に仏教側か

らの反駁書が増大し、明治期まで続くことになる。その

もののもあれば、刊行されたものもある。幕末維新期の

仏教界における真宗の位置を探る上で重要な事柄で

ある。

四

外宮・内宮問題と「秘本玉くしひげ」

（二）大坂の坐摩神社と本居宣長著「秘本玉くしひげ」

秘密玉くしひげは、宣長が天明七年（一七八七年）

二月に執筆し、紀州藩主徳川治貞へ奉じた書籍であり、

政治への建言である。治者としての自覚と仁政の実施に

ようって、民の側からの信頼を回復するように説くもので

ある。本来、出版するものではなかったが、宣長没後に

木活字本として、大坂の坐摩神社で刊行されたのである。

此の坐摩神社は式内社であり、摂津国の一宮と称してい

るように、地域の大社である。故に、同神社はこれを刊

行したのであろう。参考になるのは「秘本玉くしひ

げ」の最後の部分である。そこでは、幕府、諸藩ともに神

社の祭祀を重視すべきことが説かれているのである。坐摩

神社としては、そのあたりに関心があったともと推測さ

れる。
（園芸学，園芸学，園芸学。）

（園芸学，園芸学，園芸学。）

（園芸学，園芸学，園芸学。）
巫学談議一件引留ではないと判断される。次いで、
巫学談議一件に触れられている。岸野は柳原、足代弘訓に
巫学談議一件に採用している。足代は山田の
衰退の原因の一つとして内宮による外宮攻撃があ
ている。足代の衰退と足代弘訓件事の一つとして
巫学談議一件があると考える。
② 内閣文庫所藏『足代弘訓一件引留』の発見
従来、足代弘訓一件については、足代の柳原、足代
弘訓一件引留を見出したので、それに依拠して研究
すべきであると考えている。これまで全く注目されてこ
なかったが、所蔵先もはっきりしたこの重要な資料で
研究を仕切り直す必要があると考える。足代弘訓一件の\n迄。
③ 俗神道大意（巫学談議）
「巫学談議一件引留」は、はじめ本居大平門人であ
ったが、江戸遊学を契機として学問方法などを学ぶ、修
整した。大塩の乱の際取り調べを受けた。「巫学談議一件
を参考に当時の人々の想いを変え、大塩の乱の際に
大いに影響を与えた。この人間は、十年以内に
人間でもある。気吹舍日記の中では、嘉永四年十一月
九日 亡去大洲常磐井中衛入門東募。この人物は、
常磐井中衛、という人物が一か所登場する。この人物は、
巫学談議一件の重要人物である。
④ 此度指村大蔵大政家伊予国大州領阿戸村八幡宮
社家常磐井中衛と申人、平田篤胤著述巫学談弊一名
俗神道大意と申書を開板致し、大坂座摩社神職課
世話をして売出し度数百面、最早七八十枚を勧刻
有候風誘引候。尤も松山領二面金入ら世話
有候故此事。
優劣に言及していることが問題となっているのである。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説あるは。

中主ノ尊とも申して。水徳の神奈乃と云ふ説ある是。
平田錦蔵書簡二通」によって、上記の一件のその後の動向が確実に継続されていたことが明らかになった。なお、『巫学談弊』一件の詳細は、本文の後半に述べる。

安政三年（1856年）三月六日、菅右京、常陸大久保七郎兵衛方より、巫学談弊之一条付懸ね来（国立歴史民俗博物館研究報告一二号四〇三頁）

平田錦蔵は、『巫学談弊』一件の出版というのではなく、その内容を再考し、巫学の真実を追究するために書簡を寄せていたものである。

しかし、その後屋々の情報が確実に進められていた。また、口伝から伝えられているが、詳細は不明である。何れにしても、巫学談弊一件関連の問題は長く引き続きあるものである。

安政三年四月二日、『父君古川将方作御出征矢貫』、甲州馬場利助来、上方にて出板三段著者阿、依先処右之調をねタル処、今日来利得、弥相遠く、河内屋藤兵衛

と云書札之由、（国立歴史民俗博物館研究報告一二号四〇三頁）

二八号三三三〇三四頁

なりさつしていたものである。これで、安政四年に『俗神道大意』を刊行した。刊行にあたって、嘉永三年序を追加し、実際に出版されたものである。

安政期、平田錦は活動の幅を広げていき、次第にその存在感を増していく。『気吹キ日記』安政三年八月一日のところに、『征矢貫、菅右京、菊池貞行』、会沢八新論を著した同道に、水戸会沢常蔵方作行、会沢八新論を著した同道に、水戸会沢正志斎を訪問しているのである。この際に何が話し合わされたのかは不明であるが、日記では『新論』
の著者として紹介していることから、対外危機に関する話題が出たことは確かであろう。同年には、戦は安政江戸地震にも見舞われることになるが、被害は比較的軽微であった。安政四年正月二日、紀州藩が田舎の兵衛・中村将軍が来訪に来た。紀州藩を内命に、『古史伝』を図書館に配備することになったという（気防府日記）。このように平田派の存在感が日増しに増大していたのである。

さて、先に述べた通り、平田家では「_coeffs」巻二の刊行をめぐって、「武家の世」に関する篠胤の見解が明示されたのである。政道に関わる記述があることから出版を見合わせていたのである。文久二年七月に巻二の刊行に踏み切ったものとみられるのである。

文久期は平田国学が急進というほど勢いのあった時期である。隆盛を迎えることになるが、その状況について少し触れてもよい。文久二年五月に延慶が京都探索を行っている。次いで、平田内蔵助（篠胤）宛本学頭の寄附を受けて『(coeffs)』前掲関係資料四・六・二九）には、

父故大角皇道学精勤数十年の著作年選も相成頗規模之事に被思召候自分義父之遺志を継日夜心を用追々天朝専御用相成且諸国之門弟及多數既二古學皇国充滿著施必父子積年之研究抜群之儀

平田平田鎌倉文庫関節原資料青森県史資料編近世学芸関係』" coeffs}巻二の清書が出来ているという。①②のように、『_coeffs』巻二の清書が出来ているという。①②のように、『_coeffs』巻二の清書が出来ているという。①②のように、『_coeffs』巻二の清書が出来ているという。①②のように、『_coeffs』巻二の清書が出来ているという。①②のように、『_coeffs』巻二の清書が出来ているという。①②のように、『_coeffs』巻二の清書が出来ているという。①②のように、『_coeffs』巻二の清書が出来ているという。①②のように、『_coeffs』巻二の清書が出来ている。
六 崇徳院問題と慶応二年延盪《玉橿総論追加》

①先行研究の問題点について
中瑞雲斎の崇徳院遷廻運動に関する研究史を確認しておかなければならぬ。先ず、「史談速記録」第五一、息子中鹿一郎による父瑞雲斎の話が掲載された。父親の業績を顕彰するのが目的であるところはいうまでもない。

②文久二年大原重徳と鍼胤の会見
大原重徳が文久二年三月に江戸に下った際、平田鍼胤が大原に会見していることは既に知られている。この際、鍼胤全著作を学習院へ献納するために鍼胤は依頼されたがわかる記録を新たに見出した。「宮内庁薫版」孝明天皇紀巻五（平安神宮、一九六九年一月、九〇三頁）には、「忠能卿記」元治元年六月十日己卯自柳原過日之返状来昨夜愚考三保元乱八崇徳院之御鬱憤ヨリ発り
元八皇子重親王を絶大統度者が御事右方ヨリ朝
家御従武家之世卜成候事二候但皇政復古八不容
儀存念之候得共奉彼彼候八候
可成哉尊下八如何卜存候日本史一見心付候事ニ
候併廃皇子ニテモ無之先例ヲ無ノ儀且仏頭候ノ
当候テモ如何ニ候御賢断伺度候
右返書遺重仁親王之事尚熟考可及返答全体崇徳帝御懐
可被宥尊事再上宝剣可被尊敬事按篤胤（○平／篤胤）
時申之上旨有之可被見候
とある。中山忠記ノ一節で、これは従来平田国学研究
上では、まったく知られていないかった記事で極めて重要
なものである。篤胤が大原に対して、崇徳院の怒りを鎮
める必要を説く篤胤の著書があると言上了というので
ある。
③ 元治元年崇徳天皇七〇〇式年祭之
文久年間、崇徳院問題解決の必要性はかなり高まって
いたと考えられる。元治元年は崇徳院七〇〇式年祭に
当たるため、それを目前にした文久期に崇徳院の祭礼の
必要性が意識されていたのである。元治元年八月一日

慶応二年延暦
《玉樽論追加》
（二）慶応二年の延朧
《玉樽論追加》
この儀式に出席していないのであった。
その他、「氣吹舍日記」以外にも、崇徳院関連に関する新史料が平田篤胤関係資料の中に見つかった。
主なものとしてあげれば,
①「奉迎神霊式（白髪陵祭典次第）（平田篤胤関係資料三一八）」
②「白髪宮遷座祝詞稿」（平田篤胤関係資料三一九）
となる。①には異筆で「議州にての御式也」とあり、白髪陵神霊を京都へ迎えるための式次第である。
②は白髪陵より崇徳の神霊を「此新宮（京都の白髪社）に迎えた際のものである。先にみたいように延暦は『玉 poids総論追加』を執筆して崇徳院の祭祀の重要性を説いていたが、還遷のための準備にも関わったのである。
九月六日に崇徳院遷遷が無事終わった。その直前、八月二十七日に明治天皇の即位式があり、崇徳院遷遷直後の九月八日に改元した。二月日明治天皇が京都を発し東幸を開始した。崇徳院問題の解決は、武家が破綻、朝廷側の認らないというのは平田派の解釈であったが、朝廷側の認識もないというが平田派解釈であつたが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないということは、平田派の解釈であるが、朝廷側の認識もないことが多いことが事実である。
明治期、平田派が神祇行政（神祇官など）と文教行政（大学校・大学）などに参画することになる。しかし、十分な準備もいないまま政府に入ることになった。政府と平田派の方向性の違いは、すぐに明らかになった。
大舞台での活動は明治四年の平田派国事犯罪事件までの僅か四年ほどであった。
新政府における平田派の活動については、阪本是丸「明治維新と国学者」（大明堂、一九九三年三月）、熊澤恒里子「幕末維新における教育の近代化に関する研究」（近代学校教育の生成過程）（風間書房二〇〇七年六月）などのまとまった研究があり、最近では、三ツ松誠「平
(11) 『衛藏』報10 (毎月長浜11四四) に

衛20節

リリィ果汁田園展6衛区にかかって『衛藏』報10
オ6衛0月長浜10四四付せめも『衛藏』報6衛区
をかかって名揚りしてみせられにせられ
衛0月長浜11四四付せめも『衛藏』報10衛区
にかかって名揚りしてみせられにせられ
衛0月長浜10四四付せめも『衛藏』報10定

衛長浜付せめも海军三軍地震防備局に
衛20節にかかって名揚りしてみせられに
衛0月長浜11四四付せめも『衛藏』報10定

衛長浜付せめも海军三軍地震防備局に
衛20節にかかって名揚りしてみせられに
衛0月長浜11四四付せめも『衛藏』報10定

衛長浜付せめも海军三軍地震防備局に
衛20節にかかって名揚りしてみせられに
衛0月長浜11四四付せめも『衛藏』報10定

衛長浜付せめも海军三軍地震防備局に

解答が続くのである。長いので抜粋して引用すれば（内

関文庫三一六七／一／四三／五八八版 本『玉掟』
巻一、三六丁オ、三八丁ヲ，
① 今一時に除候では。自然公の御威に相触候に
も思はれ。中古以来代々尊信いたし。且相応に駆
走をも為り候家家に於ては。自然と霊異も可有り。
もと外国よりの居候には候へども。祀られるる上に
は少しば其家を守りたる事も有べ候へば。-

ふ。相候予。俄に追放は先見合せ候て。
② 遠かに取片付候は。何とかや不色の様にも相当
はし可申候。
③ 其ノ仏像へ。金銭又は米穀にて相添へ。寺へ送遞
しき事と存候。

必しも海川へ流しけり。又は焼棄なに当たる
いをしないようにと回答しているのであった。各家庭内
の仏像を海川に流したしたり焼き捨てたりしないように諭め
て、本論を締めくくっている。仏教側との無益な衝突を

幼い時から、篤胤は篤胤の幼い時から『朝神神神掟記』を門人
に向けて執筆した。新規入門の段階で進上するなど、積
極的に行って読ませようとしていたのである。神々への神神の
みならず、古学の大人を祭祀の対象に加えるともに、

最後に先祖の祭りに及んで居る。服部庸の指摘するよ
のに、篤胤は朝神の祭祀にかなり熱心であった。神祇伯

は『朝神神掟記』を『古風の択式』と評しているので
 abre dos campos de lavoura, a luz do sol brilhava sobre seu rosto. 

Era uma tarde tranquila, com o vento carregando o cheiro de flores.

As crianças corriam pelos campos, rindo e brincando.

As aves cantavam suas canções, e as crianças dançavam.

Era uma tarde linda, cheia de alegria e felicidade.
以别纸申上候，私义御出立前二八罢出。大二御驰走

二相成交，有合二奉称候。其辞御谈。□一 UFC

一词，谈胜之件，早速常磐。井中江委曲二相谈称候处。追及水洗仕

候様子之八御伴候得共。未夕全承引と八相见え申し候。且判伊勢外宫へ遣し申し候。八処说二御坐候。右中御申

分一外申上度義御坐候处。今日一八勤用殊之外间敷甚不本一意一八奉存候得共。此度八を得不一申上候。来月之

便一八委曲一申上奉存居申候间。右一。段幾重二也御推

被下、又难一有奉称候。申衡江委曲、相话申候。答。但し私茂相话申候を其候／文面二相認申候間、其思召二而御推誠可被下候。先候

二私候、将亦種々御丁寧之御挨拶、被仰下何共奉恐入候

次二私候無別儀、罷在申候間、乍懼御所念意思可被下候。教候得共。先一。尊前様弥御勇健被成御座珍重御儀

辺代弘訓門、人中江相渡辻申候故八、右門人判木貫受一

度段申候故、右判木当方二有候。得共一冊と申上候。人中江も道し不申候、二付何方二有候而茂、貴方之害

在二申上候儀不残水解仕。御尤至一極二奉称候

種々申上候儀不残水解仕。御尤尤至一極二奉称候

尚以时下折角御用心專一御儀奉称候、以上一

九月廿四日出、十一月十二日届日

史料

嘉永五年九月四日付平田錦庵又藤末査書簡

平田篤胤関係資料　一九二〇

七月二日出之尊籍相達、難有拜誦仕候／其破残候之奉

教候、将亦種々御丁寧之御挨拶、被仰下何共奉恐入候

次二私候無別儀、罷在申候間、乍懼御所念意思可被下候。教候得共。先一。尊前様弥御勇健被成御座珍重御儀

辺代弘訓門、人中江相渡辻申候故八、右門人判木貫受一

度段申候故、右判木当方二有候。得共一冊と申上候。人中江も道し不申候、二付何方二有候而茂、貴方之害

在二申上候儀不殘水解仕。御尤至一極二奉称候

種々申上候儀不残水解仕。御尤尤至一極二奉称候

尚以时下折角御用心專一御儀奉称候、以上一

九月廿四日出、十一月十二日届日

史料

嘉永五年九月四日付平田錦庵又藤末査書簡

平田篤胤関係資料　一九二〇

七月二日出之尊籍相達、難有拜誦仕候／其破残候之奉

教候、将亦種々御丁寧之御挨拶、被仰下何共奉恐入候

次二私候無別儀、罷在申候間、乍懼御所念意思可被下候。教候得共。先一。尊前様弥御勇健被成御座珍重御儀

辺代弘訓門、人中江相渡辻申候故八、右門人判木貫受一

度段申候故、右判木当方二有候。得共一冊と申上候。人中江も道し不申候、二付何方二有候而茂、貴方之害

在二申上候儀不残水解仕。御尤至一極二奉称候

種々申上候儀不残水解仕。御尤尤至一極二奉称候

尚以时下折角御用心專一御儀奉称候、以上一

九月廿四日出、十一月十二日届日

史料

嘉永五年九月四日付平田錦庵又藤末査書簡

平田篤胤関係資料　一九二〇

七月二日出之尊籍相達、難有拜誦仕候／其破残候之奉

教候、将亦種々御丁寧之御挨拶、被仰下何共奉恐入候

次二私候無別儀、罷在申候間、乍懼御所念意思可被下候。教候得共。先一。尊前様弥御勇健被成御座珍重御儀

辺代弘訓門、人中江相渡辻申候故八、右門人判木貫受一

度段申候故、右判木当方二有候。得共一冊と申上候。人中江も道し不申候、二付何方二有候而茂、貴方之害

在二申上候儀不残水解仕。御尤至一極二奉称候

種々申上候儀不残水解仕。御尤尤至一極二奉称候

尚以时下折角御用心專一御儀奉称候、以上一

九月廿四日出、十一月十二日届日

史料

嘉永五年九月四日付平田錦庵又藤末査書簡

平田篤胤関係資料　一九二〇

七月二日出之尊籍相達、難有拜誦仕候／其破残候之奉

教候、将亦種々御丁寧之御挨拶、被仰下何共奉恐入候

次二私候無別儀、罷在申候間、乍懼御所念意思可被下候。教候得共。先一。尊前様弥御勇健被成御座珍重御儀

辺代弘訓門、人中江相渡辻申候故八、右門人判木貫受一

度段申候故、右判木当方二有候。得共一冊と申上候。人中江も道し不申候、二付何方二有候而茂、貴方之害

在二申上候儀不残水解仕。御尤至一極二奉称候

種々申上候儀不残水解仕。御尤尤至一極二奉称候

尚以时下折角御用心專一御儀奉称候、以上一

九月廿四日出、十一月十二日届日

史料

嘉永五年九月四日付平田錦庵又藤末査書簡

平田篤胤関係資料　一九二〇

七月二日出之尊籍相達、難有拜誦仕候／其破残候之奉

教候、将亦種々御丁寧之御挨拶、被仰下何共奉恐入候

次二私候無別儀、罷在申候間、乍懼御所念意思可被下候。教候得共。先一。尊前様弥御勇健被成御座珍重御儀

辺代弘訓門、人中江相渡辻申候故八、右門人判木貫受一

度段申候故、右判木当方二有候。得共一冊と申上候。人中江も道し不申候、二付何方二有候而茂、貴方之害

在二申上候儀不残水解仕。御尤至一極二奉称候

種々申上候儀不残水解仕。御尤尤至一極二奉称候

尚以时下折角御用心專一御儀奉称候、以上一

九月廿四日出、十一月十二日届日

史料

嘉永五年九月四日付平田錦庵又藤末査書簡

平田篤胤関係資料　一九二〇

七月二日出之尊籍相達、難有拜誦仕候／其破残候之奉

教候、将亦種々御丁寧之御挨拶、被仰下何共奉恐入候

次二私候無別儀、罷在申候間、乍懼御所念意思可被下候。教候得共。先一。尊前様弥御勇健被成御座珍重御儀

辺代弘訓門、人中江相渡辻申候故八、右門人判木貫受一

度段申候故、右判木当方二有候。得共一冊と申上候。人中江も道し不申候、二付何方二有候而茂、貴方之害

在二申上候儀不残水解仕。御尤至一極二奉称候

種々申上候儀不残水解仕。御尤尤至一極二奉称候

尚以时下折角御用心專一御儀奉称候、以上一

九月廿四日出、十一月十二日届日

史料

嘉永五年九月四日付平田錦庵又藤末査書簡

平田篤胤関係資料　一九二〇

七月二日出之尊籍相達、難有拜誦仕候／其破残候之奉

教候、将亦種々御丁寧之御挨拶、被仰下何共奉恐入候

次二私候無別儀、罷在申候間、乍懼御所念意思可被下候。教候得共。先一。尊前様弥御勇健被成御座珍重御儀

辺代弘訓門、人中江相渡辻申候故八、右門人判木貫受一

度段申候故、右判木当方二有候。得共一冊と申上候。人中江も道し不申候、二付何方二有候而茂、貴方之害

在二申上候儀不残水解仕。御尤至一極二奉称候

種々申上候儀不残水解仕。御尤尤至一極二奉称候

尚以时下折角御用心專一御儀奉称候、以上一
関連史料

例

内閣文庫所蔵「巫学談弊一引引」一冊

請求記号「

四三・六一五

打付外題「巫学談弊一引引」内題「見返」「平田篤

胤著述／巫学談弊一引引」

印記「政武」 「修史／館図／書印」

『二件の概要』

嘉永四年辛亥十二月

此度橋村大蔵大夫殿旦家伊予国大洲領阿蔵村八幡宮

社家常盤井中衛と申人、平田篤胤著述／巫学談弊一

名俗神／道大意」と申書を開板致し大坂座摩社・神職

桜釈負世話を以売出し度由二而、最早七八枚斗も

彫刻出来候風聞承り候、尤松山領二而金主いし候人

中より近廵人へ向御貴之義を色々申請候人、也有之

誠歎数次第捨置かたく候二付、神宮両三輩へ、也「

内々申詰候処、不容易候義専が候へ、彼是手数等も相懸り候事故、

幸便足代権大夫殿八京都江戸熟定之家有之候二付其手

続」を以内々書状二而も遣し被吳候様致し度、神宮よ

り被申候二付、権大夫殿へ相願三条大納言並塚次郎殿

へ文通致し、被吳候所、其後返書致来、内願之趣程能

御聞入了下開板一願出候共、御聞吉無之様相成安心致

し候事」

「巫学談弊予州へ弘り候事八作者平田篤胤之男銘」胤と

申人小洲領家中へ養子二相成候二付其筋より右様弘

り候事と被察候事

『二件大納言様』（実方卿）諸大夫平羽大学助殿へ足代権

大蔵殿より「被遺候書狀左通」
度々被仰出候事二御座候所、近頃平田篤胤巫学談一幣

【名俗／神道大意】と申書を著述仕、外宮之義を種
々論じ致し近き内板行致し申し出しに相成候と申事二

御座候二右之書板行二相成候事二而者難擇置、表向願

置滅板一にも仕次第二御座候、乍併左様相成候而者、

江戸へ御願申上手数も相懸其御筋々御苦劣相懸

奉察、入候間、夫迄三不及相論候様仕度趣にて幸下拙

手続之御方々へ、御内々被仰上、右之書差支有之趣書

林へ御内意被下、板行不仕候様御差留被不度旨、外宮

三薗宜常谷四薗、宜常庸—an 肩董三人より被及示談

候、此趣三方仲間一之者へも一両輩及内談候所、待々

宜取計呑と申事二御、座候、下拙義者閉戸之隠者上

六十八に相成、俗事ハ一一切絶仕従候何、此一者

外宮之御威光ノも、拘り且又土地師職一同之迷惑に

も相成候間、何卒程一能取計仕忙心仕候、前文之通

不申候様、御差留可被下、候ハ、土地一同御厚意奉

戴可仕候、故先生より数年来、御懐意二仕何事も無御

取候工主のミ仕、種々の書を諸国に配り一ちらし候所、

等々御奉行所より御咎を獲候故、近頃は一他国二

座候、右に淮し諸国旦も外宮に領へ候得者一内宮者

三分一に御座候、夫故内宮昔より外宮方之旦家を奪

大意ノも、実は内宮方より手を入れ平田篤胤にかせ

家を被奪取、仕候事にてハ、外宮の御威光も薄く相成、

師職ハ数、代相伝之旦家を失ひ土地一同の衰微二御座

候、此段御、懐察可被下候

此内願ノ一処決して御叱被下問敬俸願候

今年者内宮蓬莱雅楽、柳営御年頭ニ参り候と承り候、

此度之義者内談之疎達之候故、正□隼人辻左京へハ

呺し不申候、昨年懐御目候橋村士佐と内談仕候、士佐
人物

二御座候、則書状も認もらひ申候。

巫学談弊

発致し

大坂坐摩神職

権報と

申者世話致し

売出し候と申風聞

二御座候。

○平田著述玉たすきと申書板行致し申候、

其内にも

六之巻に外宮の事を論し候所御座候。

願くハ此所も

相除候よう御配慮下度奉願候。

○足代からの葉子料

書を略す。

宝暦三年京都御下知、

寛政十年、

文化元年御奉行、所御

書状足代権大夫殿より被遭候節、

御栗子料左之通入

用三付、

広辻勘解由殿方にて弁用致し取計候事。

用三付、

広辻勘解由殿方にて弁用致し取計候事。

三条大納言照江、

権大夫丹羽大学助殿へ

金五百足

次郎殿へ

金五百足

三条大納言照江

権大夫丹羽大学助殿へ

次郎殿へ

金五百足

如仰今以春寒難去御座候処、

弥御安全奉賀候、然ハ

旧冬者巫学談弊之一条被仰下、

早速致披露候処へ

被仰

雲候趣至極御尤之御儀被存候則、

徳宮伝奏其上右企之社方、

中山殿之御執奏故遙々

御文之趣御直二御取調子、

御親被成候処、

御能御承

知、

則先方へ

御便二相成候処、

甚恐入決而板行者勿

論、

中山殿より右御返答御座候處、

所御安堵可被成候、

右二付、

旧冬者御金添献上被成、

且小足へ同様御

送り被下毎事畏入候、

将又枯木之、

御賞観被成桑御持仮へ可被成、

大慶、

被存候、

此間も

美濃紙御差上小足へ同廉毛茶被送下、

重々整仕合御座

候、

逸々巨細二御答可申上之処、

明後二十七日関東へ

嘉永五年壬子春

三条大納言照江。
毎参向御供二付要用而已，以代筆作失，礼得贵意候，
尚帰京後既可申伺候，先者急急如斯御候，以

〘二月十五日〙
足代権大夫様

姜永五年足代宛塙次郎返書

塙次郎殿より返書到来左之通

平田篤胤著述之巫学談弊，名／俗神道大意／と申書

を開へ板に了し売出二も可相成既之段御聞込二付，
右者／外宮之御事を論し候書二而，御聞のかしにも被
成兼／候段，椚垣御氏久志本御氏より御示談も御座候

併被仰／下候趣共，至極御尤之御次第於私も御同

意之儀二／御座候聞，其筋向内申出候処，開板同差
出二成候共／決而開板御免許無之訳二／密々取極相成候

兼面書肆へ御下知と申事者相成兼書肆ニ而開／板

仕候へ共かなず，伺之上ならてへ上木も仕訳

ニ／御座候，万々ー不心得之書肆モ着なく上木仕

候へ得者板木も取上ケニ相成，書肆之株もたれ

侯事ニ／御座候聞，書肆之方者御懸念ニ及不申儀

〘二月九日〙
足代権大夫様

敬敷御取調ニも可相成候聞，上木にても仕候八／其筋々

乍然不心得之人伺も無之，上木にても仕候八／其筋々

ハー開板之書物御見受候事も御座候八／早速御沙汰

方可有御座候／既ニ桲収負／浪花座摩／宮之祝部／と

申者上木之／企御座候哉之よし風説ニ付，正正月初開

板之催も／有之候而者，以之外之儀ニ付兼而此段差留

置候趣書／状差出申候／右之趣椚垣久志本之御兩家へ

可然様／御通行可被下候／以上／

〘塙次郎〙

昨冬中浪花人桲斎負秘本玉くしげと申書を活版ニ致

江戸へ持下り売捌ニいたし度よしを申聞／候得共，右之

聖賢之道をかれは申候書にて上／木／此節八六ケ敷物ニ

付，品々奇吟味にも可相成即々奉／存候ニ付，私取扱ニ

而，其筋へ伺差出，先々事しつかに／相渉申し候，右伺之
差出候儀不案内二者可有之候得共 如何之事一候

此上一部たりとも世上へ出不申様 堅相心得一可申

嘉永四年十二月十五日御下知

右之通り下知八有之候へ共 何已前二懸望之者へ 遣し

候振二取抜密々者摺立置候分二三十部位八人ニ 讓り候

而も不苦 乍然表向ハット致候而者不宜敷旨二極内

々はなし遣し しか新規摺立等ハ決而不相成 全々摺一

置候分之内を少々位者と申遣候事二御座候

実ハ玉くし開板之儀次第二寄公辺より御消洗にて

もへ有之候へハ 容易之教え于来相候位二も可成処全

ク私取擬一ニ而右之通り相持候事ニ而 桿抜負者大

仕合二御座候

右玉くし 昨冬三四部内々譲受置候間一部呈上仕候

御収蔵可被下候 え角ニ不心得之者有之 伺も不仕候

而板一物をこしらへ候を何分ニ々相持不申詰二御座候

無伺一開板仕候者 追々やかましく相成可申候

忠宝（塚次郎？）

奥書

右以伊予国祝祈仲間之引留書了

嘉永五年九月北川丹解石部（花押）